

# 道の国，武将の城，商人の町，そして魚米の郷 -近江の地域形成史-

秋山元秀\*

滋賀短期大学 学長

The Country of Roads, the Castles of Warriors, Towns of Merchants, and the Homeland of  
Farmers and Fishermen

Motohide AKIYAMA

President of Shiga Junior College

抄録 This paper discusses the fundamental character of Omi-country, today's Shiga Prefecture, from the view point of historical geography. I propose three basic geographical viewpoints to understand Omi-country. 1) The national roads, which constructed beginning structures of traffic network and local central places in Omi. 2) The castles and the towns which were constructed by feudal lords and merchants who were called Omi-Shonin (merchant). 3) Omi has very fertile land and lake, which have produced many farm products and freshwater products for regional prosperity. In a process of historical development Omi can be divided by regionalization in six main regions.

キーワード：近江，道，城，町，歴史地理

## 1. はじめに

近江という国はどのような特性をもっているのか，近江という地域がどのように形成されたのか，この問題を時空的にいくつかの視点から考えてみようというのが本稿のねらいである。最初は国というレベルでの「道の国」という視点である。古代の官道は近江のいわば骨格を作り，国府・郡家・駅家等，様々なランクの官製の中心地を形成した。ついで中世

に入り，近江では各地に有力な武将が誕生し，その勢力圏を確保するための拠点として城館が設けられた。近江の中世城館はおよそ1300を数えるとされ，全国的にもまれにみるような高い密度で分布している。これらの城館は，多くが平地に近い丘陵や段丘上に設けられているが，地域によっては平地の集落の中に設けられているものもあり，それぞれの地域における武家領主のありかたによって，城

---

\* E-mail:m-akiyama@sumire.ac.jp

館が地域全体の中で果たしている役割も異なっている。中世においては、一方で城館が各地に展開するとともに、村落社会においては惣村が発展し、近江は惣村の展開においても典型的な様相を示しており、村落とそれを支配する武家の拠点が相互につながりながら、中世的地域景観を形成していったと考えられる。これが中世後期になると戦国大名の誕生とともに、単純な構造の城館が複合的な曲輪をもつ城郭に成長し、さらに城郭の麓、あるいは主要な街道と城郭を結ぶ地点に「町」が形成され、新しいタイプの地域中心「戦国武将の城下町」として位置づけられていく。そしてそれが中世後期から発展してきた商業活動と結びついた時、そこに「あきないの町」が成立する。このような骨格としての街道、それに肉付けをする城郭や町場を、生業を営む基盤として支える空間が「魚米の郷」である。

## 2. 道の国

律令古代において近江国は五畿七道の中では東山道に属した。古代の道というのは、広域地域連合体とでもいうべきもので、道全体を監督する官庁があるわけでもなく、都から各地方に派出する街道に沿った一連の国の総称であった。日本がモデルにした中国唐代の道は、巡察使(のちに按察使、觀察使)という監察業務を行う官吏が置かれたが、日本では西海道(九州)の場合のみ、大宰府が西海道全体を管轄する機能を持つだけで、他の

道には政治・軍事上のまとまりがあったわけではなかった。

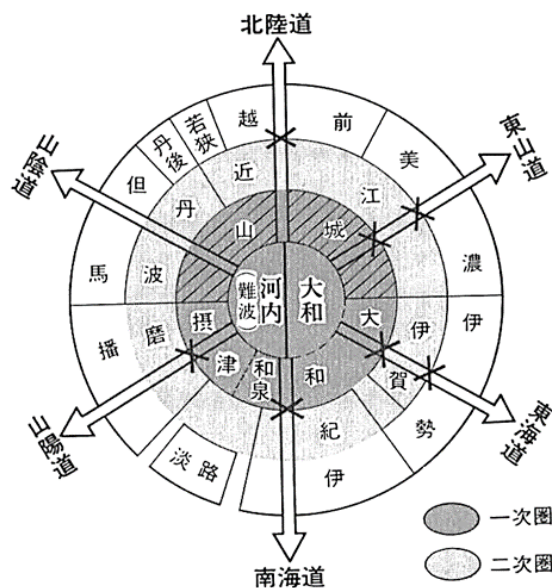


図1 畿内の構造模式図(筆者原図)

各道の最初の国が都に隣接している場合は、その国が同時に街道の最初の通過地点となるが、隣接しない場合は最初の国までは他国を通過することになった。その関係は時代によって都の位置が変わると、それにともなって変化した。

飛鳥宮・藤原京・平城京のように、大和国に都があったときは、東海道は東に隣接する伊賀国へ向かったが、東山道は大和国から山城国を通過し、そこから近江国に至ってさらに東に向かった。北陸道の場合はさらに複雑で、大和国から山城国・近江国を通り抜けて若狭国・越前国へ向かった。

都が平城京から長岡京を経て山城国の平安京に移されると、街道の経路も大きく変わる。まず東海道は伊賀国へ至るためには、大和国へ戻ったりせずに、東に向かって一旦近江国へ入り、そこから伊

賀を目指すことになる。逆に東山道は、山城国から隣接する近江国に直接向かうことができるようになった。北陸道は山城国を抜ける必要はなくなったが、若狭国へ至るためには近江を通過しなければならなかった。

このように近江国は奈良に都がある時も、京都に都がある時も、いずれの時にも主要な街道が複数通過する地であった。近江は畿内の5国ではなく、東山道に属したのだが、律令時代、飛鳥に都があった時から国家の制度として主要街道に関が設けられ、それは近江と畿内の境界に設けられるのではなく、近江と以遠の隣国との境界に設けられ、これを三関と称した。

このことから見ると、近江は畿内に属することはないものの、畿内に準じる国として、特に東国・北国に対する境界を有する特別な地位にあったことがうかがえる。都の人々に東(あずま)の国々が異質であるとみなされていた時代には、近江はその異境におもむく出発点でもあった。その位置づけは道(特に延喜式の官道)の存在によって形成されたものに他ならない。

官道であれば当然定期的に官吏が通行するし、物資の輸送についても優先される街道となる。古代日本で最も交通の頻繁な街道は、第一には西国(九州)と畿内を結ぶ山陽道であるが、次いで東国と畿内を結ぶ東海・東山両道であった。そして東国が開拓されていくとともに、その交通も着実に増加した。近江はその位置か

ら東西交通を担う役割を負っていた。近江を「道の国」と名付ける所以である。

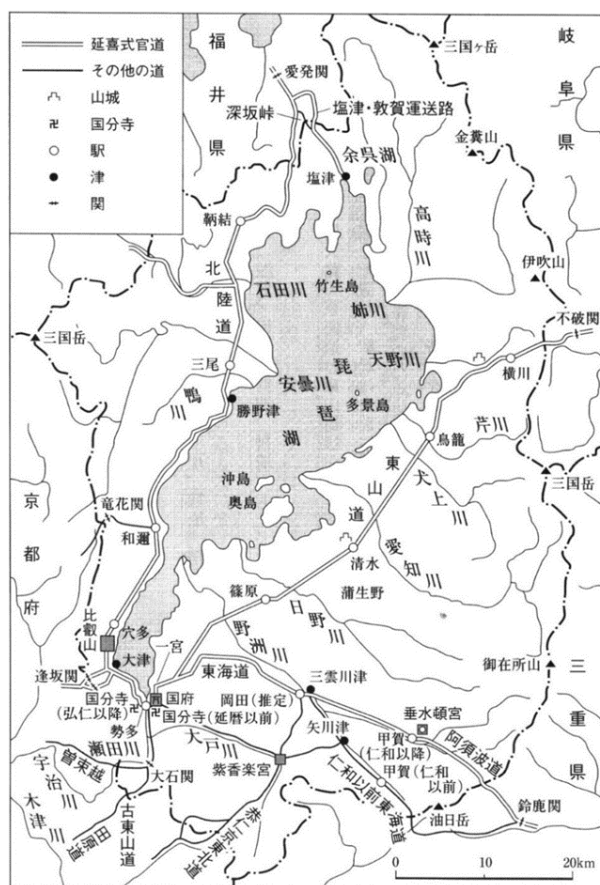


図2 近江における古代官道等(足利健亮原図)

しかし近江の道は東海道・東山道・北陸道の三官道に止まらない。それらを結ぶネットワークのような街道が存在したし、鈴鹿山脈を越えて伊勢に至る山越えの道としては、後に八風街道とか千種(千草)街道などと呼ばれる間道がよく利用された。民間の旅行者への便宜から宿や市を中心とした交通集落も生まれてゆき、東国との交通も質量ともに増加する中で、近江の道の国としての性格は一層強まったものと思われる。

東海道は伊勢との境が、勾配が非常に厳しい鈴鹿峠を越えることから平安時代にも避けられる傾向にあったが、鎌倉時

代，東国に明確に日本のもう一つの政治中心が生まれると，鎌倉と京を結ぶ街道（鎌倉街道）として，鎌倉から尾張までは東海道を利用するが，尾張からは伊勢に向かわず，濃尾平野を縦断，墨俣で木曾川を渡り，美濃で東山道に合流，不破の関から近江に入り京に向かうルートが東西交通の幹線路として使われるようになった。鎌倉幕府を開いた頼朝が建久元年（1190），大軍を率いて上洛した時も，美濃経由の路を通っている。中世に残されている旅行記も，多くはこのルートをとって東国に向かっている。

近世江戸時代になって五街道が整備されると，江戸と京都との間は，古代以来の東海道と，東山道をもとにした中山道（中仙道・木曾路）が主要な街道となったが，東海道は途中，いくつもの大河川を渡らねばならず，鈴鹿峠は急峻で山賊の出没が多いことから，女性や重要な物品の運搬（例えば茶壺道中）には，中山道が選ばれた。近江では，東海道に土山・水口・石部・草津・大津の宿が置かれ，中山道に柏原・醒ヶ井・番場・鳥居本・高宮・愛知川・守山の宿があり，続いて草津から先は東海道と同じ経路を通った。湖東には中山道以外に，朝鮮人街道，浜街道などと称される南北をつなぐ街道，また御代参街道など，主要街道を横断する街道もよく利用された。

北陸道は古代には西近江路をたどったが，中近世には京都から北陸に向かうには，西近江路のほかに，中山道（東山道）を湖北まで行き，そこから敦賀に向かう

か，栃ノ木峠を越えて直接越前嶺北に至る北国街道が使われた。そのほかに，京都からは花折街道を通して若狭に出るルート（俗にいう鯖街道）があった。

現代の滋賀県も，交通の要衝であるという性格は変わらない。とくに東西交通の幹線路は，鉄道も道路もすべて滋賀県を通過している。いま瀬田唐橋に立って上流下流を眺めると，その狭い距離の間に東西交通の幹線路がすべて集中しているのを見ることができる。日本列島のどこでもこれほど幹線路が集中している地点はない。

### 3. 八幡・彦根・大津—近江を作り上げた町の展開—

最初に述べたように，近江においては，中世における充実した城館と惣村の展開から小規模な中心地を核とした地域社会が発達したが，戦国時代にかけて大名領主の成長とともに，城下町や商業中心が生まれていった。これが近江の国を豊かにし，新しい近江の国の形を作り出していく基礎になった。ここではその過程をいくつかの町を通して見てみよう。

#### 3.1 八幡物語—近江の町の原型—

近江商人が活躍し，その活動によって生み出された最も近江らしい町としてまず八幡を取り上げたい。

八幡が近江の歴史の舞台に登場するのは安土桃山時代になってからである。八幡の名は当地の日牟禮八幡宮に由来し，この社は遠い古代に由来をもつが，それ

だけで町の成立には結びつかない。歴史上確実な八幡の飛躍的發展のきっかけは、天正13年（1585）、43万石をもって封ぜられた豊臣秀次（当時は羽柴秀次）による八幡山への築城と八幡堀や八幡の町並みの建設である。

この時、秀吉は四国の長宗我部征伐の後、摂津近江丹波などの兵を率いて阿波で奮戦した秀次に20万石、宿老たちに23万石、合わせて43万石という厚遇で八幡城に封じているのである。所領は蒲生、甲賀、野洲、坂田、浅井の近江各郡にあったという。確かに現在でも八幡の城や町は秀次に結びつけて語られることが多く、殺生関白などというが実は有能賢明な武将であったなどと評価され、秀次に関してはその最期が同情を呼んだこともあり、一種の判官贔屓として人物像が過褒されることがあるようである。

天正10年（1582）織田信長が本能寺で斃れたのち、信長の跡目を争う中で天正11年の賤ヶ岳の戦いを制した羽柴秀吉が世の主導権を握っていくのだが、その構想の中で近江はどう位置付けられていたのだろう。東近江から北近江にかけては、信長もその戦略的重要性を認識し、それゆえにこそ安土城を築いたのであったが、これから畿内のみならず東国の諸大名を制圧し、天下統一を成し遂げたい秀吉にとって、安土城に代わって近江統治の中心となる城を求めたことは想像に難くない。

事実、八幡城建設にあたっては、秀吉の命を受けた田中吉政が、城および城下

町の構想をもって着手していたともいわれている。田中吉政は近江高島の出身、のちに三河岡崎を領有し、尾張の木曾川堤を建設するなど、土木建築の専門家で、天正10年頃には秀次の宿老として仕えていた。しかしその背後にあってグローバルな構想をもっていたのはやはり秀吉と見てよいだろう。

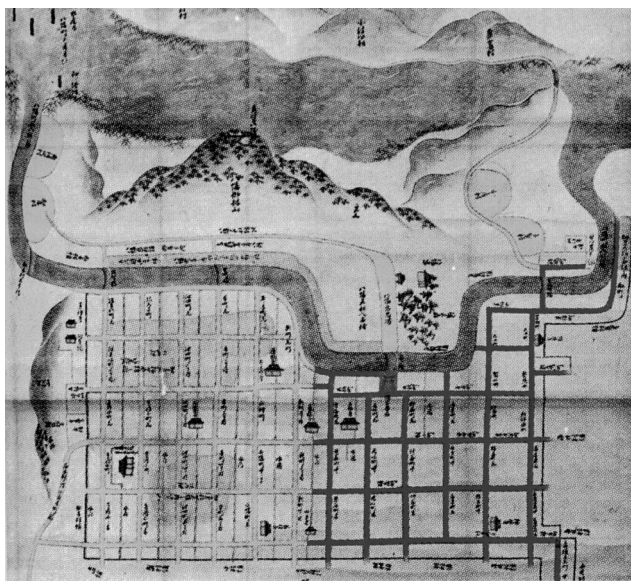


図3 江州蒲生郡八幡町惣絵図(近江八幡市)

秀吉はもともと天正元年（1573）小谷城の戦が終わったのち、信長からその旧浅井氏の領地を拝領し、その数年後には長浜城を設けているのである。畿内での新しい体制を作るにあたり北近江や東近江について熟慮したことは間違いないだろう。天正13年、八幡山城には秀次を入れて宿老の田中吉政をつけるにとどまらず、さらに水口岡山城には中村一氏、長浜城には山内一豊、佐和山城には堀尾吉晴、いずれも秀吉の信頼する家臣を秀次の宿老として配置し、八幡を中心に北近江から東近江・甲賀にかけての城郭のネットワークを秀吉は構想していたようで

ある。秀次はその頂点に置かれたコマであった。

八幡山城は標高271m（標高で示した場合、琵琶湖水面からの比高はそれからマイナス84m）の山峰の上に建てられており、安土城の198mよりかなり高い。観音寺城の433mには及ばないが、山城としては十分な高さである。八幡山城は山頂部に設けられた城郭は総石垣造りで、強固な防御機能をもち、織豊期にしては戦国時代の特徴を残しているといわれる。

しかし八幡山城の麓から南に広がる城下町は明らかに新しい時代の形態を呈している。城の大手に対して平行な縦筋が12本、それに直行する横筋が4本ないし5本、明確な碁盤目状の町割りがあり、これは現在にも引き継がれている。このような町割りは秀吉が手がける大坂や伏見の城下町に見られるものであり、居住空間として非常に開放的な印象を与える。

一方、江戸時代の城下町では、防御のための遠見遮断であるとか食い違いや丁字路をはめこむ町割りをもつのが一般的で、縦横の町筋はあってもそれが全体として碁盤目のようになるわけではない。近くでは膳所でも彦根でも町歩きをすればすぐに実感できるだろう。しかし八幡では天正14年に楽市楽座令が布告されており、その掟書に記されている内容は安土のものと変わらないという。

さらに八幡建設にかかわってもう一つ特筆すべきことは八幡堀の掘削である。八幡堀は城下町の建設と同時行われたようで、単に城郭を防御する周濠ではなく、

むしろ運河として城下町の繁栄のために機能することを目指して設けられたと考えられる。八幡は琵琶湖岸の低湿地にのぞみ、周辺にはいまでも広範に内湖が分布し、独特の水郷景観を呈している。したがって小船を使って湖水へ出るならどこからでも可能なように見えるが、深い葭原のなかを操船するのは決して容易ではない。水路は定期的に整備し水深を確保しなければ琵琶湖を運航する廻船を引き入れることはできなかった。しかし信長に次いで琵琶湖水運を掌握した秀吉は、堅田、塩津、大津といった湖岸のおもだった浦津に並んで、八幡を琵琶湖水運の湖東での中心的港湾都市にしようという意図があったのではないか。

このような八幡の城と町と堀の組み合わせは、やはり秀吉が手にかけて作った伏見城（慶長大地震で崩壊したいわゆる指月城）と伏見の町、そして宇治川付け替えによって生まれた淀川への水運という組み合わせに非常によく似ている。周辺の低湿地の開発も共通する地域政策である。政治軍事のシンボルである城郭と商工業の繁栄の場である町（都市）、それを支える交通の整備と土地開発、これこそ秀吉の地域政策の根幹といえるのではないだろうか。摂津においては大阪、山城においては伏見、そして近江においては八幡を広域中心とし、それらを連携させながらさらに日本の中心軸を作る、これこそが秀吉の構想ではなかったか。

天正18年（1590）小田原攻めののち秀吉は、論功行賞を行い、秀次は移封をい

やがった織田信雄の旧領伊勢尾張100万石を領有することになり、八幡を離れて尾張清須に入る。秀次の宿老たちも北条攻めでそれぞれ手柄をあげ、独立した大名として取り立てられ、多くは東海に所領を得ている。秀次は清須に入城した後、翌天正19年には秀吉の後を継いで関白に就任、京都の聚楽第に居住することになる。名実ともに秀吉の後継として絶頂への道にあった。しかし文禄2年、思いがけなくも秀吉に男子誕生、同4年秀次は高野山で自害して果てる。その後、幼子も含めてその眷属がすべて京都三条河原で処刑されたのはあまりに有名である。

それに続く秀吉の措置は、秀次の痕跡をすべて抹消しなければ、自身が怨霊から逃れられないという妄想に取り憑かれたかのごとくである。聚楽第に典型的に見られるように、あれほど壮麗華美を極めた一大城郭が、現在遺構の範囲を確定するのも難しいほど徹底的に破壊されている。八幡山城もそれから免れることはできず廃城となった。山麓の居館も同様であったと思われる。秀次の後に2万8千石で八幡城主になっていた京極高次も大津に移された。

しかし興味深いのは、城郭は破壊されても城下町はそのまま残されたことである。そのころ八幡にはすでにのちに近江商人と呼ばれる人たちが育っており、町の発展に尽くしていた。現在の西川産業（西川ふとん）の創業者とされる初代の西川仁右衛門は蒲生郡南津田村の出身、永禄9年（1566）に蚊帳の商いを始めたと

されるが（西川産業ではこの年を創業年とする）、天正13年（1585）の八幡建設に積極的に参加、住居も八幡城下町に移し、天正15年には山下町に山形屋を開店したという。江戸で大文字屋、大坂で近江屋を開店する西川利右衛門も同様に蒲生郡市村から八幡に移住して商売を始めている。

かれらは秀次の事件の後、かえって発奮し商業活動にうちこんだという。問題は秀吉・秀次と縁が深い八幡が、関ヶ原以後、徳川家康からどのような扱いを受けたのかだが、秀次の宿老であり八幡とも縁の深い田中吉政や秀次の後の八幡城主であった京極高次は東軍方として著しい軍功をあげており、家康に八幡の安堵を願ったのかもしれない。関ヶ原戦後、慶長6年（1601）上洛する家康が日牟禮八幡宮に参拝し八幡別院に宿泊したといわれ、八幡商人は家康に資金的援助をしていたとも考えられる。実際、諸役伝馬等免除の特権を与えるという制札が残されている。

八幡は江戸時代になってもどこかの藩領に組み込まれることなく町場として幕府領（大津代官所支配）のままで明治に至っている。そのために藩領支配に比べてゆるやかな統制しか受けず、町人の商業活動には有利な立場にあった。交通条件では八幡は中山道からははずれ、陸上交通では不利に見えるが、安土城建設以来、秀次の八幡城時代においても、京に至るには八幡経由の道、すなわち後の朝鮮人街道利用が奨励されており、家康に

続いて秀忠も上洛にあたってはこれを通った。江戸時代には大名の参勤交代は禁止されたものの、朝鮮人通信使は八幡を宿所としており、格式の高い街道として八幡はその途上の要地であった。

幕末維新期の慶応4年、大津代官所には大津裁判所が設置され、その管轄範囲は大津県とされた。したがって廃藩置県後は蒲生郡の中でも八幡は大津県、そのほかの藩領はそれぞれの県に属するという錯綜した状態であった。しかし最終的に明治4年に滋賀県に統合された。明治12年には郡区町村編制法によって行政領域としての蒲生郡が発足し、郡役所が八幡町の本願寺別院に置かれた（大正15年に廃止）。ついで明治22年に町村制が施行され、近代の行政単位としての八幡町が発足した。この八幡町を中心に周囲の村を合併して近江八幡市が生まれるのは昭和29年である。

### 3.2 長浜から彦根へ—近世的城下町の成立—

長浜城を築いたのは羽柴秀吉である。天正元年、小谷城を攻略し浅井氏を滅ぼした後、信長は秀吉に浅井の旧領湖北3郡12万石を授けた。秀吉は小谷城を新しい時代にふさわしくないと考えたのだろう、天正2年から3年にかけて、小谷城を捨てて当時は今浜といった湖岸の小浦を長浜と名づけ、そこに水城方式の城郭をつくり、これに接して城下町も築いた。城下町には小谷城の城下町をほぼそのまま移し、周辺の郷村からも商工業に従事するものを集めた。城下町の構造は、現

在の町割りから見る限り、後の近世的城下町のものではなく、八幡に施された縦横碁盤目状に貫通しているものと同じものといえる。浜には港を設け、町場には掘割で通ずるようにしている。城郭は水城という形をとるが、八幡の原型とでもいえるものがここにあった。



図4 長浜町之絵図(万延元年)

本能寺の変までは秀吉が長浜城主としてその発展を図ったのであろうが、本能寺の変の後の清須会議で長浜は秀吉の手を離れ、湖北一円は柴田勝家の所領となり、長浜城には勝家の甥、柴田勝豊が入った。しかしそれもつかの間、秀吉と勝家の争いが起こり、天正11年の賤ヶ岳の戦いに先立って、長浜の柴田勝豊は秀吉に降伏し、賤ヶ岳の戦いの後は、天正13年に豊臣秀次が八幡城主となった時に、すでに述べたように秀次の宿老が近江各地に配置されたが、長浜城は山内一豊が2万石で城主となって、天正18年北条攻めの論功行賞で掛川5万石の城主に封ぜら



れるまで在城した。その間、天正13年にはいわゆる天正大地震が起き、長浜城も倒壊したという。

その後誰が城主であったかよくわからないのだが、関ヶ原の後の慶長11年、譜代の内藤信成が4万石で長浜藩に封ぜられ、信成病没後は子の信正が継ぎ、慶長20年大坂夏の陣にあたって尼崎城の守備を担当、戦後、摂津高槻に転封となり、長浜藩は廃藩、長浜城は廃城となった。やがて出される一国一城令から見ても彦根に近い長浜に城郭は不要で、いずれは廃城の運命にあったと思われる。実際、長浜城の資材は彦根城建設に提供されたといい、長浜の町場は彦根藩の所領となって藩政支配を受けることになった。

では長浜が城郭を失っても城下町が町場として繁栄し続けたのはどのような要因によるものであろうか。まずこの城下町を作ったのが秀吉であることが一つの要因であろう。長浜の民俗行事として有名な曳山祭りも、秀吉の時代に始められたという伝承があるように、長浜の町の繁栄はしばしば秀吉に結び付けられる。八幡でも同様であったが、町人たちが町の繁栄を支えていこうという意識が芽生えるような街づくりをしたのが秀吉であったとすれば、近江のみならず大坂や伏見でもおなじことがいえるかもしれない。そのほかに琵琶湖水運と北国街道という交通の要衝に位置していることも大きいだろう。長浜の港は、彦根藩の支配下であって、松原や米原とともに水運上の特権をもっていた。

近江の湖北というのは独特の風土を持ち、豊かな農産物資源に恵まれている。彦根がいかに大きな城下を形成していたとしても、湖北をその市場圏として取り込むことには無理がある。その点で、長浜は経済的には湖北の市場を掌握する中心地として機能し、彦根藩領ではあっても彦根からなかば独立した町であったというべきであろう。

ただ一方で、彦根藩という強力な藩の保護を受けて発展したという面もあることは否定できない。江戸時代中期になると長浜周辺では絹織物（浜ちりめん）生産が盛んになり、地域の経済力を一層高める地場産業が定着する。また長浜には慶長7年（1602）開基の浄土真宗大谷寺派長浜別院である大通寺があり、湖北の真宗信仰の中心になっている。門前町を形成しており、長浜の町の構造の重要な要素である。こうして長浜が現代でも滋賀県を代表する町の一つとなるのである。

ついで彦根といえば井伊家の城下町、押しも押されもしない江戸時代を通じて有数の規模をもつ城下町である。井伊家は35万石（うち5万石は幕府領からの預かり分）という譜代大名では最高額の石高をもち、江戸時代を通じて改易されることもなく大老を何度も務めた文字通り譜代筆頭の家柄であった。35万石というのは外様大名では佐賀鍋島家、御三家では水戸家に等しい。大名の城下町の規模を石高だけではかることはできないが、石高に応じた人員がおり、それから生じる消費力もあるとすれば一定の目安にはな

るだろう。その点で、彦根城下町が近江の中で卓越した位置にあったことは間違いない。

しかしでは彦根の城と町は井伊家が封ぜられたことによって突然現れたものなのだろうか。初代の彦根藩主とされる井伊直政が、関ヶ原の戦いの後、最初に封ぜられたのが佐和山城であったのはよく知られている。直政は勇猛果敢で知られた家康の最も信頼した武将の一人、関ヶ原では先陣を福島正則と争ったり、島津退き口を単騎追いかけて狙撃されて重傷を負ったりしたことで知られている。家康はその功績を賞し18万石を与えて佐和山に封じたのであった。

佐和山といえば関ヶ原の戦いまで西軍の総大将石田三成の居城であった。佐和山城は彦根の東、湖岸平野と東山道（中山道）が走る鳥居本の谷底平野との間にある標高233mの山地に城郭が設けられている。東から中山道を来て、馬場宿から摺針峠を越えると、眼下の鳥居本宿をはさんで佐和山がそびえ、その彼方には湖水が広がる。中山道は鳥居本から南下するが、逆に北へ向かえば北陸へ向かう北国街道であるし、そこから佐和山の南を越えて彦根に向かう街道（のちの朝鮮人街道）が分岐する。まさに交通の要衝であり、佐和山城はそれを抑える好適の位置にある。

したがって佐和山城の大手は東の鳥居本の方に向かっており、琵琶湖側は搦手なのである。現在は彦根から米原にかけて湖岸平野が広がっているが、ここは入

江内湖という水域で、干拓されたのは近代になってからなのである。中山道から米原に至るルートものちに開かれたもので、戦国時代から近世初頭にかけての表街道というのはあくまで佐和山の大手を通る道なのである。

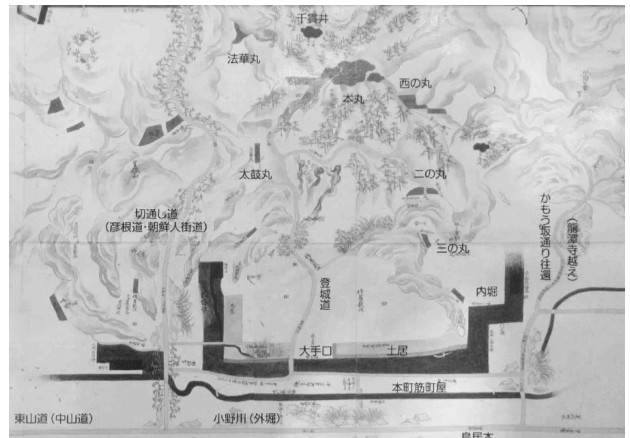


図5 佐和山城絵図(彦根城博物館)

井伊直政も佐和山の戦略的重要性はよくわかっていたはずなのに、どのような理由で佐和山を放棄したのであろうか。まず考えられるのは、佐和山はあくまで戦国時代の山城であり、城郭の構造も新しい時代にふさわしいものではなかったことである。さらにこれまでの佐和山の意義は近江と濃尾の間の要路の制圧であったが、徳川政権として必要なことは、関ヶ原では東軍勝利とはいえ、まだ強大な勢力をもつ西国大名、大坂城にいる秀頼をシンボルとした豊臣恩顧の勢力を抑えることに他ならない。そのためにはむしろ琵琶湖岸に近く、水運も制し広大な湖北湖東の平野を一望できる位置の方が良いと考えたと考えられる。直政は当初今の米原市と彦根市の境にある磯山を築城の候補地として考えたという。そこに直政の城郭建設に対する戦略観が見えて

くる。

直政の戦略観を知るためには、その経歴を知る必要がある。直政は関ヶ原以前家康の江戸入部とともに、当初は上野の箕輪、のちに高崎12万石を領有する。箕輪は北条・上杉・武田が争奪を繰り返した北関東の戦略要地であった。直政はこの城郭を改造し新しい世にふさわしい治政の拠点を作ろうとしたが、周辺の地形などから見て限界があったようである。そのために箕輪に比べてより発展性のある高崎（もと和田といった）に近世的な城郭を築き、整然とした城下町を建設した。現在の高崎の都市計画の基礎はこの時に作られた。

佐和山に入って直政が考えたのは、上野で箕輪から高崎に移って新しい中心都市を建設した経験ではなかったか。佐和山も箕輪と同じく戦国時代には戦略的要地であった。しかしこれから必要とされるのは高崎のような広い平地を擁し、城下町の発展の可能性を含み込んだ城郭でなければならなかった。

ただ無念にも直政は関ヶ原での傷が癒えず、慶長7年に逝去してしまう。その後家康も直々に指示しているが、磯山よりやや南、湖岸平野に低平な残丘のように鎮座する彦根山（金亀山）を廻って城郭を築き、その南に城下町を建設する。当初は天下普請で山上に天守を完成させ、その後は彦根藩の普請で山麓に御殿を建設し、最終的にすべての工事が終わったのは元和8年であった。佐和山城は廃城となった。その後、2代彦根藩主井伊直孝の

時に加増があつて35万石の大名家ができあがった。

城郭の建設にあたって、天守閣は大津城から移築し、彦根城独特の風景を生み出している有名な天秤櫓は長浜城から、その他、佐和山城、小谷城、観音寺城など、周辺の廃城になった城から部材を搬入しているらしく、城下町の町人にしても佐和山はもちろん、長浜の旧城下町からも移住させたものがあり、周辺の郷村在住のものが商工業で一旗あげようとするものも多数居住するようになったのではないと思われる。その中からのちに湖東商人とよばれる近江商人たちが生まれていった。また宗安寺のように上野の箕輪から佐和山に移され、さらに彦根に移されたというような寺院もある。城下町の町人にも上野からの移住者がいたかもしれない。

湖北には小谷から長浜に至る一つの都市域形成の流れがあつたが、もうひとつの佐和山から彦根に至る流れがあつて、彦根は近世の近江でもっとも充実した都市域を実現した。長浜とともに彦根は、先に述べた八幡とともに、近江の経済、文化の先進地域を作りだした。

### 3.3 坂本・大津・膳所—湖南の町々—

大津は、中世を通じて日本海と京都大阪を結ぶ陸路・水路を合わせた交通路の要衝であった。西回り航路が開発されるまで、日本海からの物資は、敦賀で荷揚げされ、陸路を琵琶湖の北岸塩津（長浜市西浅井町塩津浜）にもたらされてから

琵琶湖を水路で縦断して大津に到達し、再び陸路を逢坂山に向かったのである。塩津は今では小舟が出入りする程度の施設しかないが、かつては大規模な港とそれに関連する町場があり、近年の発掘で平安後期以降の遺跡や大量の遺物が発見されている。敦賀から塩津を経て大津に運ぶというルートは、江戸時代に入ってもしばらく使われ、敦賀や大津で日本海沿岸諸藩の廻米が売買されることも多かったという。

琵琶湖水運に関しては、従来から強力な既得権をもつ堅田の他にも、塩津、大浦、海津、今津など湖北の諸浦、湖東・湖西・湖南にもそれぞれ浦津があり、統合的な支配など行われていなかった。しかし天正15年、その前年に大津城を築城した浅野長吉（のち長政）が、大津以外だけでは船が足りないので坂本や堅田のものも集め、いわゆる大津百艘船を構成し、大津からの漕運を一元的に管理し、堅田と八幡にも廻船における優先権を認めた。大津城主の他にも船奉行（代々芦浦観音寺が務めた）を置き、大津が琵琶湖水運の要という位置を得た。

関ヶ原ののちは、大津・堅田・八幡の特権は認められたが、新しく生まれた彦根藩は自領の港（長浜・米原・松原）については、独自で運営するとして、そのための役所を大津に置いた。しかし西回り航路の開設は琵琶湖沿岸の港湾に大打撃を与え、限られた漕運をめぐる争いもしばしばみられた。船奉行も大津代官が兼務することになり、大津も水運の町と

しては相対的に地位が低下せざるを得なかった。しかし大津は東海道の宿場町でもあり、のちに大津百町と呼ばれるような町場の繁栄を生み出した。

近江の歴史の中で大津が表舞台に出てくるのは、やはり太閤秀吉の近江に対する政策が影響している。それが天正14年の大津城の築城である。では秀吉以前はどうだったのか。信長は元亀2年、比叡山の焼き討ちを行なった後、明智光秀に近江滋賀郡を与え坂本城を築かせている。その役割としては、比叡山の管理監督とともに、西近江路（北陸道）と琵琶湖水運の抑えの要であった。

この時点ではまだ安土城はできていないが、坂本城も天主を備えた壮麗な城で、のちにここを訪れたルイス・フロイスは安土城にも匹敵する城であると記している。光秀はのちに天正7年、高島の大溝城の縄張りも行なったり、丹波攻めの後の福知山城の縄張りも行なったりしており、信長政権ではこの分野の有数の専門家であったことが知られている。いずれにせよ、この時点で信長には大津という選択はなかったのである。

光秀は坂本城を拠点に湖西南部を平定、さらに船団を仕立てて湖北の浅井氏を討つべく遠征したという。天正8年、光秀は丹波一国を領有し、丹波亀山（現在の亀岡）に封ぜられるが、坂本城は光秀の居城として残され、本能寺の変に当たって光秀の重臣明智秀満が最後に籠城して戦ったことはよく知られている。

このあとすぐに坂本城は取り壊される

のではなく、秀吉は丹羽長秀に命じて城郭を再建し、長秀を城主としている。その後、天正11年、賤ヶ岳の戦いの後、秀吉の家臣杉原秀次が城主になったがすぐに逝去、そのあとに浅野長吉（長政）が入っている。そして天正14年、秀吉が長吉に命じ坂本城を破棄し、大津城の築城を命じるのである。

坂本城の城郭は前述のように、立派な天主を備えた構えがあったのは史料にも記載されているが、城下町も含めてどのような構造をもったものかはよくわかっていない。本丸は琵琶湖に面した水城で、琵琶湖から掘割を通して直接曲輪の内部に入れたようである。光秀が秀吉の長浜城に先んじて最初に水城を築いているのである。本丸から内陸に向かって二の丸以下の外郭が設けられたようであるが、城下町の範囲や規模はわかっていない。しかし狭いながらも湖岸平野の一角を占め、琵琶湖水運にも西近江路にも近接しているところから、一定規模の商業中心があって当然であろう。本能寺の変以降の再建以後の期間は短く、城主もしばしば交代しているのだから、城下町の建設が行われたのは光秀の時代と考えるのが適当であろう。

秀吉が浅野長吉に大津城を築城させた天正14年というのは、前年に大坂城も完成し、秀吉は関白に就任、京都では聚楽第の建設が始まっていた。秀次を八幡山城に封じたのもこのころである。大坂や京都により近く、琵琶湖水運も一元的に管理できる場所として坂本より大津が優

れていることは間違いない。また坂本が担っていた比叡山の管理抑制ということについて言えば、秀吉にはあえてその必要は無くなっていた。比叡山自身、焼き討ちによって大きな打撃を受け、秀吉とは通常の関係を保とうとしていた。それならば坂本がもっていた機能は、大津によってより発展させられると考えたとしていいだろう。



図6 大津城縄張復元図(大津市)

城郭に関しては坂本と同じ水城であり、琵琶湖から水を入れた掘割で、複数の曲輪をおいたと推定されている。本丸は今の浜大津あたりで、外堀は京街道（東海道）が走るあたりまで。この復元では、京都から逢坂山を越えて大津に入ってきて正面が大津城ということになる。そこから東へ行けば東海道、北へ行けば西近江路（北陸道・北国街道）ということになるし、町屋は江戸時代の宿場の範囲からして東海道と琵琶湖岸との間に広がっていたのであろう。大津城築城以前から町場は港町・宿場町が結合したものとし

てあったものであろうが、大津城が建てられてからは、その城下町としても位置付けられたはずである。

しかし大津城は慶長5年の関ヶ原の合戦直前、東軍方について大津城最後の城主京極高次が西軍の大軍を迎えて奮戦し、開戦前日まで足止めするという功績をあげるのだが、大津城はこれによって廃城になってしまう。しかし城郭は無くなっても、大津は幕府領で、当初、大津奉行と大津代官が置かれ、近江全体の幕府領を管轄した。後には代官所に統合されて明治まで続いた。大津の町は大津百町と呼ばれるように近世を通じて繁栄した。百町の中には、坂本町・堅田町のように、明らかに坂本・堅田から移住してきたものによってつくられてと思われる町もある。

ちなみに京極高次は文禄4年、八幡城から移封してきたのであり、八幡の城下町形成の経験を生かした面もあったかもしれない。また大津城は4層5階の天守をもっていたが、これが彦根城へ移築されて3層3階のこぶりの天守になっていることが明らかになっている。思いかけない面で歴史遺産は受け継がれているのである。

関ヶ原の後、家康は大津城を再建するのではなく、全く別の場所に城を築くことを考えた。その目的はまだ力を残す大坂方や強力な西国大名への抑圧として、近江と京大坂との出入口を塞ぐことであった。近江一国の守りとしては佐和山（彦根）に重臣井伊直政を置いたが、大津城で京極高次が西軍を食い止めた記憶も新

しいところで、近江南部にもう一ヶ所抑えの城が欲しかったのだろう。のちに大津城の天守閣が彦根に移築されていることからすれば、大津城の破壊の程度もそれほどではなく、修復可能ではなかったかとも思えるのだが、もとはやはり秀吉の城であり、新しい場所を求めたのであろうか。選択にあたっては東西交通の要衝と言われた瀬田城跡なども考慮されたというが、瀬田では琵琶湖に対してやや奥まり過ぎであろう。瀬田の唐橋も視野に入れて、琵琶湖全体にも目配りができるような位置として膳所が選ばれたのではないだろうか。

膳所城は慶長6年、天下普請第一号として築城された。縄張りは藤堂高虎が行なった。大津城と同じ水城で、湖面に本丸を突き出し、それに横並びに二の丸、三の丸と配置しており、内陸に武家屋敷の一面を作り、それを湖水が導入される堀で囲んでいる。堀の外側には東海道が走り、その外に城下町が広がるという構造を持っている。このような特徴は、長浜、大溝、坂本、大津など、戦国期の近江の城下町が共通してもっているものである。

最初の城主は関東で5千石の譜代の家臣であった戸田一西が3万石で入ったが、次の世代には改易となり、その後、本多康俊、菅沼定芳、石川忠総が入封したが、いずれも短期で転封、慶安4年、本多俊次が7万石で入封し、その後は改易されることなく11代を経て明治維新を迎えた。廃藩置県で膳所県となったが、のちに大津県、そして滋賀県となった。町としては

明治22年に膳所村，34年に膳所町，昭和8年に大津市と合併して今に至る。

湖南西部では，戦国の騒乱の舞台になった宇佐山城から坂本城を経て大津城に至る流れがあり，大津城は関ヶ原で前哨戦を戦う舞台となった。その後徳川300年の太平の世を，宿場町港町としての大津と城下町としての膳所が一塊のように琵琶湖の南岸にあって安定した都市域を形成し，家康が当初意図した西国への抑えとしての役割は果たさずに済んだ。

#### 4. 魚米の郷—近江の生業—

近江は江戸時代を通じて第一に米の一大生産地であった。近江米(江州米)は全国においても高く評価されており，石高は江戸期を通じて増加しつづけた。慶長3年(1598)には77.5万石，正保2年(1645)には83.2万石，元禄10年(1697)には83.7万石，天保5年(1834)には85.3万石と増加し続け，全国で有数の農業大国であった。

天保5年の石高で近江より多いものは出羽(130万石)，下野(101万石)，武蔵(128万石)，越後(114万石)くらいで，近江に近いものは上野(77万石)，信濃(78万石)，美濃(70万石)，越中(81万石)，伊勢(72万石)，肥前(71万石)などであった。江戸時代，東北北陸の日本海側，関東・中部の面積が広い国は石高が高いが，西日本は一般に低かった。その中で近江は農業大国であった。

これに合わせて人口も多く，天保5年の人口は54万余を数える。近畿の諸国では，大坂を抱える摂津(76万)と播磨(60万)に

は及ばないものの，山城(49万)，大和(36万)，紀伊(50万)，伊勢(50万)よりは多く，全国レベルでも上位に位置する。

このような高い石高と多数の人口を支えたのが，新田開発による水田の拡大，商品作物(茶・煙草・麻・イグサ・菜種・木綿・薬草など)の栽培による現金収入の増加であった。商品作物の栽培には金肥が利用され，当初は伊勢から，中期以降は小浜や敦賀経由で北陸方面からの干鰯・干鮭が入り，油粕・醤油粕なども使われた。

これらの作物によって作られる産品は，近江商人の手で全国に流通したものもあったし，現在に至るまで特産品として知られているものもある。例えばイグサからは蚊帳・畳表がつくられ，菜種からは菜種油，麻からは麻織物がつくられた。茶(信楽・土山・永源寺など)やもぐさ(柏原・伊吹)も近江特有の農産物である。

また様々な手工業も近江の産業の特性である。近江には古代の渡来人の技術による陶器生産から始まり，畿内に近いところから先進的な技術が早く伝わり，それをもとに技能集団が成立したり，地域的にまとまった特定の産地が生まれたりした。

信楽焼(現甲賀市)は中世以来茶の湯の道具生産を行い，近世には日常雑陶器の製造で地場産業として定着した。穴太(穴生)石工，穴太衆(現大津市)は戦国城郭の築城技術，特に石垣の穴太積みで著名であり全国に広まった。国友鉄

砲・鉄砲鍛冶（現長浜市）も彦根藩・幕府御用となり、日野鉄砲（現日野町）は水口藩御用として、戦国以来の技術を伝えた。そのほかに甲賀・日野の売薬製造は往来の旅人に販売する薬品製造（中山道鳥居本宿有田家の赤玉神教丸、柏原宿の伊吹もぐさ、東海道草津大角家の和中断など）から、行商による置き薬として全国へ展開した。

高宮布は中世以来の伝統をもつ麻織物（近江上布）で、江戸時代には彦根藩の統制品となっていた。近江蚊帳は愛知川・八幡・長浜で製造されていたが、行商人の重要な持ち下り荷となった。長浜縮緬は京都西陣の技術が伝わり、18世紀中期にはじまったものだが、彦根藩の特産品として京都で販売され、ちりめんの銘品となった。特殊なものとしては、西山糸・大音糸（生糸を使った琴・三味線など和楽器の弦、現長浜市）も郷土色豊かな地場産業である。

広々とした水田風景と村落、それに加えて地元根付いたモノづくり、これが近江農村の「原風景」である。近江はこれに加えて水の郷、漁の里という側面をもつ。

琵琶湖の周辺には、最大の漁業基地である堅田（慶長年間130隻の漁船）をはじめ多くの港があった。小松（大津市）、横江（守山市）、舟木（高島市）、筑摩（米原市）、石寺（彦根市）、沖島（近江八幡市）、山田（高島市）などが大規模な漁業を行った代表的な漁港である。琵琶湖には網漁のほかにエリ（魷）やヤナ（簀）などの独特の

漁法があり、それが湖岸の風景を独特のものにした。

## 5. 各地域の特性

以上を総括して、近江の各地域が歴史地理的にどのような特性をもっているかをまとめておきたい。

### (1) 湖南西部(滋賀郡)

本地域は、古墳時代から県下第二の規模をもつ前方後円墳の茶臼山古墳、前方後方墳の皇子山古墳などがあり、古代の有力豪族の勢力圏であったと考えられる。律令古代には大津宮が置かれたほか、寺院跡も多数存在する。畿内に接して近江でも最もその影響を強く受けた地域である。またこの地域に比叡山延暦寺が建てられたことは、近江一国に留まらない大きな意味をもった。延暦寺はあくまで近江に立地した寺院であるが、その山容が平安京の東北に当たることから、都の鬼門を扼する寺院として都に対して絶大な力をもった。その山下の里坊を擁する町としての坂本は、寺院経済の中心であると同時に、湖南の交通中心であった。戦国期には坂本、大津、近世には膳所という城下町があり、また中世以来の寺内町・港町であった堅田を擁し、宿場町・港町の大津が近江全体の幕領の代官所在地として、藩領の中心都市圏とは異なる機能をもった。

### (2) 湖南東部(栗太郡・野洲郡)

本地域は近江で最大の河川である野洲川の下流デルタを擁し、水との共存を図ることによって発展を図ってきた地域で



ある。東部の丘陵地帯から大量の銅鐸が出土するなど、先史時代から先進的な地域であり、律令古代には瀬田の丘陵地帯に国府や国分寺が置かれるなど、高いレベルの中心地であった。古代官道も平安京遷都以来は、東海道と東山道が縦貫し、駅家が置かれる場であった。中世においても東海道と東山道に沿って市場と宿が組み合わされた中心地が成長し、これがのちの草津や守山のローカルな町場になっていった。

応仁の乱に際して、将軍足利義尚が近江の六角定頼を征伐するために出陣した鉤陣屋は、現在の栗東市にあるが、畿内の勢力と近江の勢力が衝突すると、往々にしてこの地域が戦場となった。前近代の交通手段でいえば、ちょうど京都から一日歩行の距離にあるのがこの地域であった。

また守山には、蓮如の時代に大規模な寺内町を形成し、信長と対峙した金森御坊があり、野洲には親鸞の遺跡を残す木辺錦織寺があり、近江での真宗布教史の痕跡をよく残す地域である。

### (3)甲賀（甲賀郡）

この地域は古代から東海道が縦貫し、南東に向かえば奈良にも近く、奈良時代には信楽に宮都が置かれたほどであった。地形的にもまとまりが明確で、中世にも土着勢力が展開し、惣村的まとまりが強い地域であった。小規模なものまで含めれば、近江で城館の遺跡の分布が最も濃密な地域である。戦国期には水口に城郭(岡山城)が築かれ、水口が他に比べて中心

性の高い町場となった。近世の水口城の設置はその傾向を一層強めた。

水口から土山にかけての野洲川上流のなだらかな丘陵地帯は、江戸時代後期から地場産業としての製薬業や茶業が盛んになり、地域の経済を支えた。

甲賀の中でも、信楽は自然環境も厳しく、近江でも辺遠の地にあるが、独特の産業をもち、独立性の強い地域であった。信楽の多羅尾に置かれた天領代官も、信楽の歴史的な特殊性を示している。

### (4)湖東（蒲生郡・神崎郡・犬上郡）

琵琶湖の東岸、近江で最も豊かな平野に恵まれた地域である。古代にも蒲生野と呼ばれ、畿内と東国を結ぶ近江の中心になる可能性をもっていた。その遺志は近世になり、近江商人の活躍によって実現されたといえるかもしれない。

東部には鈴鹿山地がそびえるが、山間の峠道を通る間道も多く、伊勢との交易がこれを使って盛んに行なわれた。山間世界との交流が豊富であったのもこの地域の特徴である。

中世城郭としては観音寺城に代表される大規模な山城が展開し、その下に石寺のような町場が成長した。信長が安土城をここに築いたことで、新しい時代の中心都市の誕生をもたらした。戦国期から近世にかけては、蒲生郡の八幡と日野、神崎郡の八日市、犬上郡の彦根といったそれぞれ個性のある城下町や 附属する町場が発達し、近江商人の故郷という特性にも支えられて、近世には近江で最も政治力・経済力の強い地域であった。

#### (5) 湖北（坂田郡・浅井郡・伊香郡）

古代から北陸との交流路であり、大陸系氏族の居住地でもあった。古代官道の北陸道は、湖西を北上するが、最終の越前へ至る愛発路は湖北を経由したと考えられ、それと東山道（中山道）をつなぐ経路（北国街道，北国脇往還）が湖北を縦貫することになり、これが湖北地域の交通上の大動脈となった。また塩津，大浦，菅浦などは，琵琶湖水運が日本全体の運送体系の中で重要な役割を果たしていた時には，大いに繁栄した港津であった。

中世には京極氏の勢力圏であり，居館と町場が，山上の城郭や寺院と一体になった上平寺(現米原市)は，この地域を代表する中世城館景観を呈する。戦国期になると，京極氏に代わり浅井郡の小谷に城館を構えた浅井氏が主導権を握るようになる。小谷は北国街道に沿っており，浅井氏は越前の朝倉氏とも連携して，湖北から越前にかけての圏域を手中に収めた。

美濃から上洛を狙い，その途上で障害になる勢力はすべて平定しようとしていた信長に，浅井長政が反旗を翻らせたのは，上洛という天下の論理で迫る信長に対し，長政は湖北だけではなく，近江一国のアイデンティティを守ろうとする論理が作用したという見方もできるかもしれない。しかし小谷は陥落し，次の天下人秀吉によって長浜が生み出された。近世に発達した地場産業とあいまって，独特の風土に支えられた経済文化圏が，長浜を中心に形成された。

#### (6) 湖西（高島郡）

この地域は安曇川のデルタとその上流の山間地域からなっている。古代には北陸道が縦貫するとともに，隣接する若狭小浜とはのちに九里半超えと呼ばれる街道で結ばれており，山間を経由して京都へ直接結ぶ街道（花折街道，俗に鯖街道と呼ばれた）もあった。琵琶湖水運でも，古代の三尾駅家からはじまり，海津，今津，舟木など，多数の港津が存在した。高島は近江では西北の辺境にあるように見えるが，決して孤立した地域ではなく，多様なネットワークに属していた。中世から現れる高島商人と呼ばれる商人たちは，近江商人の中でも有力な一群である。

信長の時代，安曇川デルタの南端に，長浜や坂本と並んで信長の甥津田信澄によって大溝城が設けられた。しかし城郭は短命に終わり，近世には大溝藩の陣屋として町場が存続した。また山間ではあるが交通路が交差する朽木にも，佐々木氏の流れをくむ朽木氏の城館があったが，近世には陣屋として小規模な中心集落として機能した。

#### 付記

本稿は令和4年5月21日，歴史地理学会大会（会場：滋賀大学教育学部）で行った公開講演の発表資料を加筆修正したものである。この機会を与えられた歴史地理学会に感謝する。

## 参考文献

本稿は筆者がこれまで発表してきた以下の著述と既往の業績をもとに作成したものである。

秋山元秀『宇治橋－歴史と地理のかけはし－』  
宇治市教育委員会，平成6年

秋山元秀：西近江路の地域と交通『志賀町史』  
第2巻．志賀町，平成11年

秋山元秀：県の性格（滋賀県）『日本の地誌  
8（近畿圏）』（金田章裕・石川義孝編）朝倉  
書店，平成18年

秋山元秀：甲賀市の地理的環境『甲賀市史』  
第1巻，甲賀市，平成19年

秋山元秀：東海道の往還『甲賀市史』  
第1巻，甲賀市，平成19年

足利健亮『日本古代地理研究－畿内とその周  
辺における土地計画の復元と考察－』大明堂，  
昭和60年

足利健亮『地理から見た信長・秀吉・家康の  
戦略』（読みなおす日本史）吉川弘文館，平成  
27年

小林健太郎『近江地域研究』ナカニシヤ出版，  
平成10年

助野健太郎・小和田哲男『近江の城下町』  
桜楓社，昭和46年

中井均『近江の城 城が語る湖国の歴史』  
サンラズ出版，平成9年

『角川地名大辞典』 25滋賀県，角川書店，  
昭和50年

『日本歴史地名大系』 25滋賀県の地名，  
平凡社，平成3年

滋賀県の地方史志類（書誌情報は省略）

『滋賀県史』『大津市史』『近江八幡の歴史』  
『彦根市史』『新修彦根市史』『長浜市史』  
『米原町史 通史編』『守山市史』『守山市誌』  
『草津市史』等